

女子学研究会の10年

信時哲郎

(甲南女子大学 日本語日本文化学科)

0. はじめに

女子学研究が今号で第10号となったが、最初の研究会がいつだったのだろうか、とホームページを見てみると2010年。こちら10年めのものである。そこで今回は、この10年を振り返ってみることとしたい。

1. 甲南女子大学女子学研究会 (2010年度)

期日については記憶がない。ただ第1回の研究会が、2010年7月21日、馬場伸彦先生の「写真と女子」であったことからすると、おそらくはこの年の春ごろであろう。本研究会の出発点は、教授会終了後、文化社会学科の池田太臣先生と雑談しながら歩いていた時の会話であった。

「何かおもしろいことないですかねえ…」

「研究会しましょうよ。」

「女子学ってのはどうですか？」

「ん？」

「女性学じゃなくて、うちの大学は女子力なんていうコピーを作ったこともあるので、女子ですよ、で、女子の学問！」

「あ、いいですねえ。女子の趣味行動とか、ファッションとか、たしかに女性学だと、そういうことやらないですからね。」

「社会的な意義となると、たしかに女性学に比べたら低いかもしれませんが、でも、きちんと考えて、きちんと整理しておかないと、あとになって、なんであの頃の女性たちはこんなことやってたんだ、ということが分からないままになってしまいますよね。」

およそ、そうしたやりとりがあったように思う。どちらがどう話したのか記憶にないのだが、同期で甲南女子大学に着任した池田先生とは学科や学部を越えて、いろいろ話をする機会があったので、こういう話もふわっとできたのである。そしてゆるっと、ふわっと女子学研究会が結成された。女子か！

やはり同期着任のメディア表現学科・馬場先生、そして文化社会学科の米澤先生たちにも声をかけ、7月には第1回の研究会となったようだ。ここで「ようだ」と、あやふやな言葉を使っているのは、当時の手帳に女子学研究会のことが書かれていないからだ。馬場先生の発表内容については、おそらく「女子学研究」などの誌面を見て、てっきり参加していた気になっていたのだが、どうも私は参加していなかったらしい。

ともあれ、2010年度の例会第1回～4回は下記のとおりである。

2010年07月21日 「写真と女子」馬場伸彦（甲南女子大学）

2010年11月24日 「ファッション誌における『女子』」米澤泉（甲南女子大学）

2011年01月27日 「オタクの“消滅”」池田太臣（甲南女子大学）

2011年03月07日 「『鉄子』はなぜ増えたのか？」信時哲郎（甲南女子大学）

3月になると、研究発表は現在のような1回に2本立ても行っていったようだ。しかし、ここまで見るだけでも、全員が甲南女子大学の専任教員によるもので、開催日も平日である。ということもあって、「女子学研究1」が甲南女子大学女子学研究会による刊行であることも、自然な流れかと思う。学外の人間を参加させまいとしてそうしたわけではなく、学内の委員会やサークルのようなつもりでの開催だったからだ。また、この頃は、科研費に応募しようと、毎回、齷齪と応募書類を作っていたのも思い出される。

研究会誌もその年度に作ることとなった。「女子学研究1」(2011年03月)の目次は下記のとおり。

- ・「「カワイイ」と女子写真 饒舌と共感の共同体」馬場伸彦 (甲南女子大学)
- ・「ファッション誌における「女子」」米澤泉 (甲南女子大学)
- ・「女性キャラクターの言語表現」西田隆政 (甲南女子大学)
- ・「「鉄子」はなぜ増えたのか？」信時哲郎 (甲南女子大学)
- ・「オタクの“消滅” オタクイメージの変遷」池田太臣 (甲南女子大学)
- ・「タイにおける日本文化と「女子学」展開の可能性」藤田渡 (甲南女子大学)
- ・「「女子」の意味作用」河原和枝 (甲南女子大学)

2. 女子学研究会 (2011年度)

翌年の変化としては、女子学研究会から「甲南女子大学」の冠が取れたことである。実はこの年度は、サバティカルにて、私は研究会に参加していないのだが、池田先生の知人や研究仲間も多く参加し、研究会も平日ながら、ほぼ1ヶ月に1回開催していたのだから、まったくたいしたものである(学外の方々には、ご足労をかけ申し訳ありませんでした)。例会第5回~13回は下記のとおり。

- 2011年4月27日 「タイの女子もかわいくなりたい タイにおける日本文化と『女子学』展開の可能性」藤田渡 (甲南女子大学)
『女子』の意味作用」河原和枝 (甲南女子大学)
- 2011年06月01日 「女性向けマンガに描かれる働く女性のイメージ」増田のぞみ (甲南女子大学)
- 2011年07月06日 「KPOPアイドルの『海外おっかけ女子』」吉光正絵 (長崎県立大学)
- 2011年09月15日 「腐った女子の作品消費とコミュニケーション 男性オタクとの比較考察」東園子 (大阪大学大学院)
- 2011年10月19日 「かわいいとカワイイの狭間で」鳥集あすか (大阪大学大学院)
- 2011年12月21日 「阪神間の女子大学の比較」森仁奈 (関西学院大学大学院)
- 2012年01月25日 「女性向け男性同性愛マンガの歴史的変遷 1970年から1997年まで」西原麻里 (同志社大学)
- 2012年02月23日 「Maid / Made in Otaku Culture あるメイド喫茶についてレポート」池田太臣 (甲南女子大学)
- 2012年03月29日 「描かれる〈うっ〉 マンガ表現の可能性についての考察」秦美香子 (花園大学)

この年も無事、3月に「女子学研究2」(2012年03月)が刊行されている。

- ・「女子と下着の蜜月 身体意識の変化によってファッション化した下着」米澤泉 (甲南女子大学)
- ・「90后女子が夢見る日本 中国の女子大生が好むドラマと音楽の傾向」吉光正絵 (長崎県立大学)

- ・「普通」の女子の生きづらさ 女子大生の就職状況から」森仁奈（関西学院大学大学院）
- ・「<家族>を目指すBLマンガ」西原麻里（同志社大学）
- ・「台北腐女子事情」東園子（大阪大学大学院）
- ・「百合」作品言語考 作品『百合男子』を補助線として」西田隆政（甲南女子大学）
- ・「描かれるくうつ」マンガ表現の可能性についての考察」秦美香子（花園大学）
- ・「オタク女子の楽園 メイドグラフィティ in 大阪日本橋(1)」池田太臣（甲南女子大学）
- ・「カフェと女給」馬場伸彦（甲南女子大学）

3. 『「女子」の時代！』刊行

こうして着々と成果を出しながら、雑誌ではなく単行本としても「女子学」を世に問おう、という話が盛り上がり、青弓社から2012年4月に『「女子」の時代！』が刊行された。編著は池田・馬場両先生で、概要は以下のとおりである。吉光先生以外は、甲南女子大の教員であり、この一冊を読めば、女子のことなら何でもわかる、というものではないにしても、約10年後になっても、各先生方にとっての記念碑的な論考が収められているのが印象深い。

はじめに いまなぜ女子の時代なのか？ 馬場伸彦

第1章 「女子」の意味作用 河原和枝

第2章 卒業のない女子校 ファッション誌における「女子」 米澤泉

第3章 「かわいい」と女子写真 感覚による世界の新しい捉え方 馬場伸彦

第4章 「少女マンガ」と「女子マンガ」 女性向けマンガに描かれる「働く女性」のイメージ 増田のぞみ

第5章 オタクならざる「オタク女子」の登場 オタクイメージの変遷 池田太臣

第6章 女子と鉄道趣味 信時哲郎

第7章 K-POPにはまる「女子」たち ファン集団から見えるアジア 吉光正絵

おわりに 池田太臣

いったい何部売れたのかは定かではないが、2版が出たことは確かで、CiNiで調べてみると大学図書館の蔵書としてだけでも266件になり、朝日新聞の書評（2012年07月01日）、読書欄に松谷創一郎の記事（2013年4月14日）が掲載され、その他、数紙にも書評が載ったように記憶している。辛口ではあったが、斎藤美奈子の書評もあった。

なんとかこれを外国語訳して海外の人にも読んでもらいたいと思っていたのだが、時々刻々と変化する女子を追いかける学問（同時進行？）のゆえもあって、今から、そのまま訳出したとしても、時代遅れの感は否めまい。それでも、女子学の国際化は、未だに捨てきれない夢である…

4. 池田先生サバティカル（2012年度）

2012年度は、今度は池田先生のサバティカルである。代表は信時となり、前期は、ほぼ1ヶ月に1回ペースを守っていたが、後期には失速している。第14回～第18回までの例会は以下のとおり。しかし、ホームページには掲載されていない幻の回も2月に開催されていることが、過去のメールをチェックしている際に気づいたので追記しておきたい。

2012年04月25日 『ファンであること』をすること ヴィジュアル系ファンの会話分析」永松佳奈恵（関西学院大学大学院）

- 2012年05月23日 「女子向けテレビアニメにおける外国イメージ 1960～80年代を対象に」 東園子（大阪大学）
- 2012年06月27日 「イメージとしての「美人」とイデオロギー 顔と美意識に関する覚書」 馬場伸彦（甲南女子大学）
- 2012年07月25日 「女子と美人 鏡よ鏡、世界でいちばん美しいのは誰？」 米澤泉（甲南女子大学）
- 2012年10月20日 「女子鉄道ファンに関する一考察 ジェンダーと趣味的社会化の視点から」 塩見翔（関西大学大学院）
- 「イメージの広がりから考える『ベルサイユのばら』の人気について」 貝沼明華（中京大学大学院）
- 2013年02月23日 『『落第忍者乱太郎』の「聖地」尼崎をめぐる』 西田隆政（甲南女子大学）
- 「消費されるプリンセス」 西原麻里（同志社大学）
- 『『翔んだカップル』がもたらしたもの』 信時哲郎（甲南女子大学）
- 「女子とおっかけ」 吉光正絵（長崎県立大学）

2月の例会が幻の18.5回例会である。この時は出席者も少なかったが、発表が4本。「女子学研究3」（2013年03月）に発表予定の論考についての報告会であった。「女子学研究3」の目次は下記のとおり。

- ・「少女たちにとってのオスカル」 貝沼明華（中京大学大学院）
- ・「大学鉄道サークルにおける女性メンバーたち」 塩見翔（関西大学大学院）
- ・「ゴシック&ロリータと『不思議の国のアリス』の親和性について」 富田あゆみ（名古屋大学大学院）
- ・『『落第忍者乱太郎』の「聖地」尼崎をめぐる』 西田隆政（甲南女子大学）
- ・「消費されるプリンセス お姫様が日本文化のなかで生きるために」 西原麻里（同志社大学）
- ・「ショッピングと着せ替えゲーム化 「わがままファッション GIRLSMODE よくばり宣言」をめぐる』 秦美香子（花園大学）
- ・『『翔んだカップル』がもたらしたもの』 信時哲郎（甲南女子大学）
- ・「モードとヌード ファッション写真における衣装と裸体」 馬場伸彦（甲南女子大学）
- ・「女子とおっかけ」 吉光正絵（長崎県立大学）
- ・「仮装と武装 なぜ「女子」はキレイになりたいのか」 米澤泉（甲南女子大学）

5. 常態にもどった女子学研究会（2013年度）

2013年度は、池田先生が戻ってきたことから常態に戻った女子学研究会。第19回～第23回までの例会は以下のとおり。

- 2013年04月24日 「集合体、個人そしてプロデュセイジ 英語圏におけるファン研究の流れ」 池田太臣（甲南女子大学）
- 2013年07月27日 「「女子力」の社会学 雑誌の質的分析から」 近藤優衣（東京大学卒業）
- 「女兒とゲーム 雑誌の特徴から考える」 秦美香子（花園大学）
- 2013年09月07日 「女子とポピュラー音楽 K-POP ガールズグループの受容比較から」 吉光正絵（長崎県立大学）
- 「BLマンガにおける男性キャラクターの表現」 西原麻里（同志社大学）
- 2013年12月26日 「女子文化/Chick Cultureにおける林真理子論（ポスト）フェミニズムのフロント・ランナー」 吉岡愛子（上智大学）

「女子教育における良妻賢母とホスピタリティ 平安女学院を事例に」永田美江子（平安女学院大学）

2014年03月15日 「台湾ジェニーズ研究」陳怡禎（東京大学大学院）

「女と欲望とロックと私—フェミニズムと女性の欲望の主体性を斜め上から見ると」
荒木菜穂（甲南女子大学他非常勤講師）

女子学研究会のサイト (<http://www.http://joshigaku.net/>) も文化社会学科・佐伯ゼミ生の協力により、この年から運営が始まり、「女子学研究4」（2014年3月）もweb上からダウンロードできるようになった。同誌の目次は下記のとおり。

- ・「女と欲望とロックと 『伝説のグルーピー』に見る女性の欲望の主体性」荒木菜穂（甲南女子大学他講師）
- ・「オタク的コミュニケーションの悦楽 メイドグラフィティ IN 大阪日本橋（2）」池田太臣（甲南女子大学）
- ・『『女子力』の社会学 雑誌の質的分析から』近藤優衣（東京大学卒業）
- ・「再び『落第忍者乱太郎』の「聖地」尼崎をめぐる 尼崎市とファンの関係性とは」西田隆政（甲南女子大学）
- ・「宮沢賢治研究と女性」信時哲郎（甲南女子大学）
- ・「BLマンガ研究の多様化に向けて 作品研究の概観と展望」秦美香子（花園大学）
- ・「女子と島」吉光正絵（長崎県立大学）
- ・「大人女子のREDな冒険」米澤泉（甲南女子大学）

6. 展開の年（2014年度）

2014年度になると、研究会の出席者、発表者、雑誌への投稿者も甲南女子大教員の比率が下がり、また例会への出席者には大学院生や学部生も散見されるようになってきた。甲南女子大の大学院生も初の例会発表を成し遂げている。また、初の甲南女子大学外での実施（12月の花園大学での例会）もあり、展開の年、と言えるかもしれない。第24回～第27回までの例会は下記のとおり。

2014年05月31日 「ローカルアイドルは何を目指すか 名古屋アイドルを例に」田川隆博（名古屋文理大学）

「アバター身体論—ネットのなかの自撮り女子」馬場伸彦（甲南女子大学）

2014年07月19日 「日常的撮影行為とその記号性 日常写真は何を撮っていたのか」松木綾子（甲南女子大学大学院）

「少女マンガ化する身体 「デカ目」志向の背景を探る」増田のぞみ（甲南女子大学）

2014年09月13日 「女性向け性表現とその国際的流通（中国の事例を中心に）」守如子（関西大学）

「『あこがれ』の空間形成～雑誌『ディズニープリンセス』比較分析より」西原麻里（甲南女子大学非常勤講師）

2014年12月27日 「世界コスプレサミット 海外のパフォーマンスと日本のコスプレイヤーの比較」貝沼 明華（金城学院大学大学院・研究生）

「キュン★とウツリ…♪から見る姫デザイン」福岡ひとみ（グラフィック・デザイナー）

「女子学研究5」（2015年3月）の目次は下記のとおり。

- ・『癒し』としてのコミュニケーション メイドグラフィティ in 大阪日本橋(3) 池田太臣(甲南女子大学)
- ・「宝塚歌劇団と女子養成 『清く正しく美しく』にみる女子教育」永田美江子(平安女学院大学)
- ・「三度(みたび)『落第忍者乱太郎』の『聖地』尼崎をめぐる リポートする楽しみとは」西田隆政(甲南女子大学)
- ・『男子新体操の社会学』に向けて 観客の語りから見る男子新体操界 秦美香子・野田光太郎(花園大学)
- ・「パルコの女からルミネの女子へ ファッションビル広告に見る女性像」米澤泉(甲南女子大学)

7. 悪ノリの年？(2015年度)

例会も順調に、雑誌も順調に刊行を続け、例会の出席者も多すぎも少なすぎもせず、雑誌の投稿者も多すぎも少なすぎもせず、まことにうまく進んでいる。しかし、海外遠征や海外への紹介の機会はまだにないという状態のまま。それを打破するため、というわけではないが、この年も新しい企画、名古屋で開催されている愛知県主催のポップカルチャーイベント「ぼぷかる5」に出前出場した。大きな宣伝はしていないが、来場者もあって、それなりの成果を収められたように思う。まあ、「それなり」でしかないのではあるが… 第28回～第31回までの例会は下記のとおり。

- 2015年04月18日 「ことばを通じた市場創造：女子会・女子力・大人女子」松井剛(一橋大学商学研究科)
「オタクイベントの現状と問題点～現場からの報告(仮)」大森未也(ぼぷかる)
- 2015年08月29日 「越境するロックフェス女子 インターネットと音楽をめぐるインテグラルなアクション」永田夏来(兵庫教育大学大学院)
「鉄道趣味世界における女性ファンたち インタビュー調査から見るその位置づけと意義」塩見翔(関西大学大学院)
- 2015年12月19日 「『ヴィジュアル系』世界の女性たち インタビュー調査から見るバンギャル・アイデンティティ」大尾侑子(東京大学大学院学際情報学府)
「宝塚にみる下品 宝塚少女歌劇団に対するファンからの規範的評価とその帰結、『歌劇』昭和3年7月から昭和8年6月の投稿欄を分析して」御幸英寛(滋賀大学大学院)
- 2016年01月10日 「制服偏愛考 私たちが制服に惹かれる理由」馬場伸彦(甲南女子大学)
信時哲郎(甲南女子大学)、米澤 泉(甲南女子大学)、池田太臣(甲南女子大学)、田川隆博(名古屋文理大学) 他
- 2016年03月05日 「米澤泉著『女子のチカラ』を読む」米澤泉(甲南女子大学)

年度最後の米澤先生の本の合評会も、新しい試みだった。女子学研究会発足以来、米澤先生には『「女子」の誕生』(2014年7月、勁草書房)、『女子のチカラ』(2015年12月、勁草書房)があり、また、先の話になるが『「くらし」の時代：ファッションからライフスタイルへ』(2018年2月、勁草書房)もあって、勁草書房にとっては浅田彰の『構造と力』以来のベストセラーではないか、と思うほどの人気で、新聞やテレビ、雑誌、WEBなどで米澤先生が活躍されているのも、これらの本がきっかけであるように思われる。その活力の元が女子学研究会で会った、とは申しませんが！

2016年3月の「女子学研究6」の目次は以下のとおり。

- ・「ファンならば、ファンなれば、こそ 真冬真夜中午前二時、JF2016 徹夜組の外側から」石田沙織(明治大学大学院)
- ・「手作り」とモノをめぐるインタビュー」塩見翔(関西大学大学院)
- ・「女子もすなる『艦これ』といふもの」西田隆政(甲南女子大学)

- ・「美人論序説 「美人」はいかに語られるのか」馬場伸彦（甲南女子大学）
- ・「「ぼぷかる」参観記」信時哲郎（甲南女子大学）

8. 留学生、新聞記者、学部生（2016年度）

2016年度は、研究発表者の多様化が特徴だろうか？ その内訳は、留学生や学部生、また毎日新聞のスタッフを招いての例会など、バラエティに富んでいる。初期の研究会では、毎回のように甲南女子大学教員が女子学のテーマを持ち寄っては発表をしていたように思うが、この頃になると聞き役、コメンテーター役に回る傾向が出てきている。第32回～第35回までの例会は下記のとおり。

- 2016年07月02日 プレ女子学研究会「「女子」の中国語訳をめぐって」丁瑤（甲南女子大学留学生）
「現代女子論の連載を終えて」毎日新聞「現代女子論」記者スタッフ
「家族写真と女子 幸福な時間の錬金術」馬場伸彦（甲南女子大学）
- 2016年10月15日 「変身の意識 コスプレイヤーとキャラクター」貝沼明華（金城学院大学大学院）
「活動の源としての『愛』 女性達が織り成す創作と交流」石田沙織（明治大学大学院）
- 2016年12月11日 「地下ドルになるのめたいへんだ ある地下ドルのアイデンティティ形成に関する実証的研究」寺本侑加（龍谷大学院社会学研究科）
「ファンによる受容空間の開拓 字幕組アニメ受容がもたらしたもの」程遥（京都工芸繊維大学大学院）
- 2017年03月01日 「「古着×かわいい」研究」坂本歌奈子（龍谷大学社会学部生）
「アイドル「解散」で可視化される論理と感情 ネットニュースの計量テキスト分析より」田川隆博（名古屋文理大学）

「女子学研究7」（2017年3月）は下記のとおり。

- ・「ファンシップ／ファンダム ～ファン研究のプラットフォームの整備にむけて」池田太臣（甲南女子大学）
- ・「「農的女子」の食と生き方 予備的考察の試み」塩見翔（関西大学大学院）
- ・「「大人」になった「ロリータ」」富田あゆみ
- ・「大学生女子ゲーム事情 学生生活と趣味とゲームとのバランス」西田隆政（甲南女子大学）
- ・「ミスコン意識の現在」信時哲郎（甲南女子大学）

また、この年度から共通科目で「女子学」が始まった。池田先生が総合プロデュース。馬場、米澤、増田、信時の各教員がそれぞれの持ちネタを披露するというオムニバス形式の授業だ。毎回履修制限いっぱい200人ほどの受講者があり、なかにはテストもせず、肩の凝らない話題が多いということから受講する学生も少なくないと思われるものの、学生からのコメントは、まさに生きている女子たちの声であり、各教員の授業や研究にも生かされているものと思う。

9. 『ポスト＜カワイイ＞の文化社会学』の刊行（2017年度）

2017年度は吉光正絵・池田太臣・西原麻里編著の『ポスト＜カワイイ＞の文化社会学』（2017年4月、ミネルヴァ書房）が出たことが最大の出来事だったかもしれない。本研究会の活動ではないにせよ、執筆陣には編著者の先生方をはじめ秦美香子、永田夏来、荒木菜穂といった本研究会で発表された方々もならび、副題に「女子たちの「新たな楽しみ」を探る」とあることから、『「女子」の時代！』に次ぐ第二の女子学研究会の本だと言っても過言ではない内容… そんなこともあってか、年度初めには、シンポジウムが開催された。第36回

～第 39 回までの例会は下記のとおり。

- 2017 年 05 月 14 日 「<カワイイ>の現在地を考える。 吉光正絵・池田太臣・西原麻里編著『ポスト<カワイイ>の文化社会学』（2017 ミネルヴァ書房）を読む」
「本の内容の紹介」吉光正絵（長崎県立大学）
「プリンセスになること、プリンセスであること」西原麻里（愛知学泉大学）
「女兒とゲームの創造／想像的関わり」秦美香子（花園大学）
「女子の日常とロックのアンビバレントな関係」荒木菜穂（甲南女子大学非常勤 講師）
米澤泉（甲南女子大学）、馬場伸彦（甲南女子大学）、信時哲郎（甲南女子大学）、司会 池田太臣（甲南女子大学）
- 2017 年 09 月 16 日 「変身する顔 コスプレイヤーにおけるメイクの意識」貝沼明華（金城学院大学大学院）
「自著紹介 渡部周子『つくられた「少女」―「懲罰」としての病と死』（日本評論社、2017 年）」渡部周子（島根県立短期大学）
- 2017 年 12 月 26 日 「秘密のかわいさ イラスト文化からみる女子コミュニケーション」坂本歌奈子（龍谷大学）
「『美少女戦士セーラームーン』にみる消費・受容の変遷」西澤ゆきの（奈良女子大学大学院）
- 2018 年 03 月 07 日 「ボーイズラブの臨界 <木原音瀬>というノイズ」森本智子（甲南女子大学）
「女兒向けアニメにみる新自由主義時代の社会的規範 『プリキュア』シリーズを手がかりに」木村至聖（甲南女子大学）

「女子学研究 8」（2018 年 4 月）の目次は下記のとおり。正確に言えば年度を越えているのだが…

- ・「エッセイ：可愛げのない「酒場女子」のいる風景 酒場の魅力とモヤモヤと」荒木菜穂（甲南女子大学ほか非常勤講師）
- ・「声援（応援）の社会学 予備的な考察」池田太臣（甲南女子大学）
- ・「「ヨーガ」の経験と意味づけに関する研究ノート」塩見翔（関西大学・関西国際大学非常勤講師）
- ・「アイドル「解散」で可視化される論理と感情 ネットニュースの計量テキスト分析」田川隆博（中部大学）
- ・「舞台大好き！ 観劇から「学ぶ」女子学生たち」西田隆政（甲南女子大学）
- ・「「女子アナ」という職業」原良枝（甲南女子大学）
- ・「ボーイズラブの臨界 <木原音瀬>というノイズ」森本智子（甲南女子大学）

10. 「特集」の誕生（2018 年度）

2019 年度の途中から、2 本の発表をバラバラな内容にするよりも、統一させた方がお客さんも来やすく、議論も本格化するのではないか、ということから統一を持たせることにした。12 月には「宝塚歌劇×マンガを考える」を、また 3 月に「雑誌『VERY』」を特集した。今後も、これを続けていくという意志は明確ではないものの、中には他に発表者を探してくるのが難しそうなテーマもあると思われるため、「こだわり過ぎること」には注意していきたいと思う。

この年度も、最初は米澤先生の新刊が出たためにシンポジウム風の研究会とした。第 40 回～第 44 回までの例会は下記のとおり。

- 2018 年 05 月 12 日 「シンポジウム 筆者と読む／語る『「くらしの時代 ファッションからライフスタイル

- ルへ』 米澤泉（甲南女子大学）
池田太臣（甲南女子大学）、坂本歌奈子（龍谷大学大学院）、反橋希美（毎日新聞社）
信時哲郎（甲南女子大学）
- 2018年07月15日 「中国「女子」文化への一考察」 瀬辺啓子（佛教大学）
「「女子アナ」という職業 今日のなまなざしと専門性」 原良枝（甲南女子大学）
- 2018年10月13日 「宝塚はなぜ美しいか」 永岡俊哉（羽衣国際大学）
「「おっさんずラブ」にみるテレビドラマの現在形」 森本智子（甲南女子大学）
- 2018年12月27日 「宝塚歌劇と漫画の関係史 手塚治虫から「ベルサイユのばら」そして「ポーの一族」へ」 藪下哲司（映画・演劇評論家）
「マンガ原作作品の「宝塚化」 少女マンガのアダプテーション」 増田のぞみ（甲南女子大学）
- 2019年03月02日 「雑誌『VERY』からみる主婦イメージの変容」 黒田摩耶（京都大学大学院）
「『VERY』な主婦は幸せか 新専業主婦の四半世紀」 米澤泉（甲南女子大学）

特集の始まりは第43回「宝塚歌劇×マンガを考える」であったが、日本マンガ学会少女マンガ誌部会との共催企画で、設立以来の来場者があった。

「女子学研究9」（2019年5月）は以下のとおり。これも年度を越えての発行である。

- ・「コルセットファッションでゴシック&ロリータは「大人」になる 「Salon Corset Night」への参加を通して」 富田あゆみ
- ・「刀剣女子推して参る！ ゲーム『刀剣乱舞』から広がる世界とは」 西田隆政（甲南女子大学）
- ・「「りぼん」投稿時代のさくらももこ・矢沢あい・吉住渉」 信時哲郎（甲南女子大学）
- ・「「おっさんずラブ」にみるテレビドラマの現在形」 森本智子（甲南女子大学）

今更ながら、西田先生は、これまでの全9号のすべてに投稿しておられる。ご専門の国語学から学生とのツアーレポート、インタビューなど、まさに女子大学ならではのレポート／研究であり、その探求心には驚かされる。第10号での記録更新に至らなかったのは誠に残念…

11. 10周年をむかえて（2019年度）

先の章末に西田先生のことを書いたが、投稿について西田先生にかなう者はないにしても、40回を超える例会をここまで続けてきたのも、すごいものだなと思う。もちろん女子大学で開催しているために、日々「女子」の生態に付き合っている者には、語りたことのストックが尽きないとはいうものの、それにしてもよくもよくもネタが尽きないものだな、と、自分たちの研究会でありながらもしみじみと思う。

第45回～第47回までの例会は下記のとおり。

- 2019年06月08日 「鉄サーの姫？」 堀之内美香（甲南女子大学鉄道文化研究同好準備会OG）
「芦屋と鉄道と観光と」 加藤優花（甲南女子大学鉄道文化研究同好準備会・日本語日本文化学科4年）
「鉄道写真家から見た鉄子さん」 野沢敬次（スタジオ夢銀河：鉄道写真家）
「女子を惹きつける鉄道CMの世界」 尹梨香（甲南女子大学広報課）
「女性鉄道ファンを捉え直す 「趣味」活動から「愛好」活動への変化とともに」 塩見翔（関西大学等非常勤講師）

進行・信時哲郎（甲南女子大学）

2019年09月07日 「青文字系 Kawaii Culture にみる音楽アイデンティティ」 西村明美（大阪市立大学大学院）

「女子とライブ遠征」 吉光正絵（長崎県立大学）

2020年02月08日 「社会運動空間における「女性の遊び」」 陳怡禎（日本大学）

「音楽フェスとジェンダー」 永井純一（神戸山手大学）

どのような研究が、どのような時代になされてきたのか… といったことまで論じれば、また興味深い発見もあったかもしれないが、10年間に扱われたタイトルを並べただけでも、いろいろな変化があったことはお感じ頂けたのではないかと思います。

本研究会のみの力によるものとは思わないにしろ、「女子」が「女性」とは少し違った使われ方をするようになってきていると思う。また、それが「女の子」という意味ではなく、「女のこ」の意味であり、その「こ」には10代や20代はもちろん、30代でも、40代でも使用可能であるということも、もう広く認識が行き届いて来たかと思う。今後は、ますます領域を広げ、そして深め、なかなか実現はしない国際的な広がりについても、追い求めていきたい。